

# Language of Birth and Life : A Conversation with Morisaki Kazue

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-11-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/38446">http://hdl.handle.net/2297/38446</a>

森崎和江インタビュー  
“生む・生まれる”ことば  
いのちの思想をめぐって

Language of Birth and Life:  
A Conversation with Morisaki Kazue



インタビュー&編集=結城正美  
YUKI, Masami  
(金沢大学)

〈死〉が伝統的に思索されてきた一方で、なぜ〈生〉にはそれほど哲学的関心が向けられてこなかったのか。そのような問題意識が森崎和江の作品の多くを貫いている。「私たちはふつう、人間のいのちを考えると、誕生から死までという、生まれたのちの一代を考えるのであって、生まれるいのち、あるいは産むいのちについては考えません。」<sup>(1)</sup> そのような主張にうかがえるように、森崎は問題の在り処を一代主義的な生命観に見定めている。生まれて死ぬ、ではなく、生まれて産んで死ぬ、というふうにより、〈産む〉という視点を導入することにより、連綿とつづく生を言語化し思想化する試みを森崎は半世紀にわたって続けている。

生というテーマで語られる話のなかでも、自身の妊娠時に経験した「私」という一人称に対する違和感をめぐる話は、森崎のいろいろな作品で繰り返し言及されていることもあって、とりわけ印象深い。妊娠中だった森崎は、それまで問題なく使っていた「私」ということばをある日突然使えなくなったという。以来、森崎は一人称の「私」と子を宿す私とのズレに思想的まなざしを向け、ズレの原因が、産む私と生まれた私の分裂にあることを突き止める。

私がかつ知っていることばのすべては、私という用語すら、生まれたものの意識秩序で流れていた。そこには産むものの肌ざわりがない。私の心は母を呼びつつ泣いた。幾千幾万の母たちの、産室の無力へむかって泣いた。[中略]そしてこの世に、産小屋の伝統があるいみを、知った。女たちが子産みのとき、家を離れ村を離れて、うぶごやへ向っていたその民俗の文化的いみを知った。それ

は、生まれた者の秩序が支配する世の中から、産むものがそっと身を引く姿に違いなかった。<sup>(2)</sup>

「産むものの肌ざわり」が感じられることとはどういうものなのだろうか。それは「生まれた者の秩序が支配する」社会のことばと、言い換えれば生者中心主義的なことばと、どのように異なるのだろうか。

『からゆきさん』をはじめとする多数の作品のなかでも、全身全霊が震わされるほどの衝撃をもって私が森崎のことばの世界と対峙したのは、「新しいのち」(所収『北上幻想』岩波書店、2001年)を読んだときであった。ほんの10頁ほどのこのエッセイで語られているのは、森崎の友人(『からゆきさん』に登場する「綾さん」)の墮胎、自身の妊娠時に経験した「私」という一人称への違和感、その後の出産・子育てへの期待、敗戦直後の子売りの風景である。友人の墮胎や一人称の違和感をめぐるエピソードは、ほかの作品ですでに語られており、とくに目新しい内容ではない。しかし、出産と死産(墮胎)、子育てと子売りという、通常対立的なものともみなされる現象が、まったくそのように語られず、むしろ(いのち)の諸相として、同じ大きな枠組みのなかでとらえられている森崎のことばに、私は「産むものの肌ざわり」を微かに感じる思いがした。

『いのちの母国』、『いのち、響きあう』、『いのちへの旅』など、後年の森崎の作品には(いのち)ということばがひととき目立つ。森崎のいう(いのち)には、(生)も(死)も含まれている。(生)か(死)か、という二項対立的な図式ではなく、(生)と(死)が(産)をとおしてつながっている、そしてまた別の(生)へとつながっていく、そういう位相が森崎のいう(いのち)なのだ。

ここに掲載されるインタビューは、2010年12月25日から26日にかけて、森崎の暮らす福岡県宗像市にある響灘をのぞむ宿でうかがった話を編集したものである。生者中心主義的な価値観を揺さぶり、生の思想、いのちの思想を探究する森崎の(ことば)の母胎について、森崎のいまの想いを知りたい——そのような趣旨でお話をうかがった<sup>(3)</sup>。タイトルにある“生む・生まれる”という表現は、本インタビューの終わりのほうで引用した森崎の詩論「《生む・生まれる》モノログ」に由来する。「生む(産む)」と「生まれる」が分け隔てられていない、“生む・生まれる”の両義性を具現することばが朝鮮語にはあるそうだ。森崎のいのちの思想は、そのような“生む・生まれる”が渾然一体となったことばの位相において紡がれるはずであり、その意味で新たな言語観の探究をともしなうものでもある。

## 共通語と方言

—— 17歳のときに朝鮮から日本へ移られたのですよね。

**森崎** 父が冬の夜遅く帰ってきて、「和江、進学する学校は決めているだろう」と言いました。私は奈良女高師を受けようと思っていたの。父が、「すまないけれども、この戦争は必ず負ける。こちらから金を送れなくなることがあるかもしれない。僕の早稲田時代の安部磯雄先生がご苦労なさせて女性にも勉学の道を開きたいと言って、郷里の福岡市に、日本で最初の女子専門学校を開いていらっしゃるので、そちらに行ってくれないか」と。そして、「お金が送れなくなったら、本家の

会社で働かせてもらいなさい」と。それで2月の海を渡りましたの。

連絡船もほとんど撃沈されていて、小さい船でした。その船には若い兵隊さんたちが乗っていて、女は姿が見えないのよね。兵隊さんが海に飛び込む訓練をしていて、強そうな人にくっついて訓練を受けたわね。

下関だったかしら、私ひとり降りたのよ。忘れませんね、あの日のこと。

女専では寮に入りました。教室ではみんな共通語、でも寮では夕食後に食堂でいくつかのグループになって何かしゃべっているの。「おどんが

くさ、おどんがくさ」って言ってらっしゃるから、私も仲間に入りたくて「何がくさいの?」と聞くと、一瞬きょんとんとして、アハハと笑われました。——「私はね」という意味の方言だったのですね。

**森崎** 「私」にはさまざまな表現があるのよ。男性・女性でも違うし、地域でも違います。

—— 朝鮮での森崎さんのご家庭では方言は使われていなかったのですか。

**森崎** もちろん使いませんし、学校でも誰も話しませんでした。知らなかったの。

私の生まれた大邱<sup>テグ</sup>では日本人の学校が四つありました。町のほうから第一、第二、第三、第四へと広がってくるのですが、私の通っていた第三小学校は鳳山町にあったの。男の子が、「第三小学校ボロ学校、入ってみたらクソだらけ」って歌うのよね、全然そんなことないのに(笑)。私が小学校に入ってはじめて覚えた歌よ。陸軍将校官舎の子が大半の小学校。

—— 一般的に、共通語は〈国家〉のことばで方言は〈土地〉のことばというふうには、両者を対立的にとらえる見方があります。けれども、「四十年ぶりの話しことば」をはじめとする森崎さんの書かれたものを読むと、国家イデオロギーとは関係のない、いわば手塩にかけた話しことばとしての共通語、というものがあるとい印象を受けます。

**森崎** 教科書用語をよしとするのではなく、方言で働いてきた人たちにお会いしたかったの。方言を学んで学校用語を捨てようとしていました。

—— 共通語を捨てようとなさったのですか。

**森崎** 共通語は恥ずかしくて使えないわけよ。方

言を知って、これが日本だと思ったの。引揚げ後は父も方言を使っていたのでしょけれど、本家では村中の人が集まってきていろいろしゃべっていたけれど、私は音楽のように聞いていて。

—— どれくらいの頻度で故郷に帰っていたのですか。

**森崎** 2、3年に1度くらいですね。

—— 日本に戻られてからは、方言を話す人を訪ねて歩かれたのですか。

**森崎** 女専のクラスメートに炭坑町のお医者さんの娘さんがいらして、石炭の採れるところを見たいと思いました。

幼いころ、両親に連れられて大邱川<sup>たいきょうがわ</sup>の広い河原に行ったときに、白い石ころがいっぱいあって真ん中を水が流れていたのを見て、「うわー、天の川ね!」って言ったら、「これは河原っていうんだよ」って。あんな河原のように石炭はいっぱい転がっているものだと思っていたの。

1955年、29歳のときに筑豊を歩きました。久留米から博多に行く“汽車ぼっぼ”に乗って、筑豊線に乗り換えて、地図を見ながらこの辺が炭坑かなと思って降りたの。そこは中間駅でした。駅の前を歩いていたら労働者ふうの人が歩いて来たので、「石炭はどこで採れるのでしょうか」って訊ねたら、「ちょっと止まって。ほら、いま掘りよる、足の下」って。「えっ、地面の中ですか」って、私、足が震えて。ハイヒールを履いてたし、恥ずかしくてね。小さな旅館に泊めてもらい、夜、外を見たら小山が燃えているのよ。旅館の人に訊いたらボタ山だと教えられた。

その何年か後に中間市に移ったの。

## 両性で産むいのち

—— そのころから詩を書いておられたのですか。

**森崎** 詩は子どものころから書いていたけど、結核で佐賀県の療養所に入って、そこでも書いていた。担当のお医者さまが「学生のときに結核になるのは知識不足ですよ。あなたのお薬はこれです」とおっしゃって、医学書を2、3冊置いてい

ってくださったの。そこに自然治療力というのがあって読みました。

九州飛行機株式会社での学徒動員中、1日だけお休みがあって、油絵を描きたくて樋井川の土手でキャンバスを広げたの。通りがかった人に、「この非国民が!」とキャンバスを蹴とばされて、

絵描きになるのを止したの。

—— 私自身、祖父母は戦争を体験しましたが、あまり戦争の話は聞いていません。

**森崎** 女は戦場に行けないから、それだけで非国民なのよ。そのかわり、遊郭は戦場にも配置されるわけね。私は女性の立場に立って、日本の国を考えたかったの。

敗戦になってほっとした。女専には戦中は「文学科」「家政科」もなく、「数学科」「物理化学科」「保健科」となっていたから、「保健科」に行ったけど、学校に行ってもつまらなくて、九大に足が向いていました。

そのころ、私は通りに立っているいろんな人に呼びかけていた。「みなさーん、人のいのちは女だけが産むものではありませんよ。いのちは、男と女と一緒に産むのです」と。そう叫んで、またスタスタと道を歩いていたの。「この阿呆たれ」と男性が笑っていた。

—— 「記憶の海」に朝鮮の生活ペースは日本よりもゆったりしていると示唆されていますが、道行く人びとに叫ばずにはいられないという衝動の背景には、朝鮮と日本の生活のペースの違いがあるのでしょうか。

**森崎** 日本人がせかせかしているのが気になってね。しかも、せかせかの範囲が小さいのよね。そんななかで子どもを産んだり消したりしているわけで、叫ばずにはいられなかったのよ。娘っこの私が。

—— ご両親はほんとうに仲の良いご夫婦だったようですね。

**森崎** 仲が良かったですね。父は母を「愛子さん」と呼んでいました。私は日本の男はみんなそうだと思っていたの。慶州中学校長当時に母は発病して、九州大学病院で手術を受け、3年過ぎたころから病床につきました。忙しい父でしたから、昼休みに校長官舎に急いで帰って来て、陽のあたる縁側の籐椅子に愛子さんを坐らせて、5分ほど雑談して、抱っこしてまた布団に寝かせて、仕事に戻っていました。

—— 両性で産むということはいつごろから考えはじめたのですか。

**森崎** あの両親をみていましたから、子どものころから両性で産むというのが普通だと思っていました。ずっと朝鮮にいたら意識化されなかったかもしれませんね。日本には遊郭があって、産むことも男性の原理でことばになっているわけで、本当に驚きました。

—— ご自身の出産に際して、「両性で産む」ことのできる場所をお探しになったのですよね。

**森崎** 連れ合いがお産婆さんは駄目だと言って、二人で病院を回りました。

—— お産婆さんは駄目で、病院ですか。

**森崎** 私自身が病院で産まれているのです。

私のクラスメートが日本に里帰りすると、あまりに内地が遅れていることにびっくりするのね。植民地は都市化が進んで、生活も便利でした。

私が妊娠したとき、父は病気でしたが、「和江、子どもはお腹の中で10カ月過ごすんだよ。君は子どもと一緒に元気よく過ごさない。10カ月かかってようやくこの世に生まれるんだよ。人間はこの世からさよならするときも、そのくらいはかかるんだよ」って話していました。

父は脾臓がんでした。母は胃がんでした。九大で手術を受けて、にこにこして帰って来て、3年くらい発病しなければ大丈夫だといわれていました。私は小学校を出たら自由放任だよといわれて育ちました。

—— 大邱高等女学校に通うために下宿にいらしたころ、小包の中に赤玉ポートワインをしのばせる、そういうお母さまだったのですね。

**森崎** ワインは自由放任になったから飲みなさい、ってことだったのでしょね(笑)。でも、針に白と黒の糸を通して、私が通しきれないと思ってそれを送ってくれたりもしました。そんな母でした。

—— 愛情の深いご家庭だったのですね。

**森崎** 生まれたのも大邱の三笠町の一宮病院で、父親も立ち会って生まれているものと思っていたわけですが。訊いていませんが。人間は両親があるからこそ生まれるものと思っているわけですね。連れ合いになった男性も「二人で産もうね」と言ってくれて、みんなそうだと思っていました。別

に特別なことだと思わなかったの。

それで二人で病院を回って、久留米市の赤十字病院の産科で産みました。そこは畳の部屋で、布団が敷いてあって、「ご主人は膝について和江さんはご主人の膝の上に頭を載せて、両手をしっかり握って、大きく息を吸って、吐いて～」と。全然痛みはなくて、するりと生まれました。

—— 現在でいうラマーズ法ですね。

**森崎** 私が産む2年前に日本にラマーズ法が入っていたので、きっとラマーズ法を勉強していた人たちがいたのね。

その後、福岡県女性史の編纂に関わりました。平成元年に集団の総称が「婦人」から「女性」にな

り、それを記念して女性史を編纂することになったのですが、毎月1回の会議で会う委員にある男性がいて、「僕はラマーズ法で子どもを4人産んで、くたびれた～」って(笑)。私の連れ合いも産んだあとはくたびれて眠っているわけよ。私は眠れなくて、窓の外から赤い炎みたいなのがすーっと赤ん坊のほうに来て、「あなたは誰のものでもない あなたはただ あなたのもの 春の光があなたに触れて あなたをのばす」と心につぶやいていた。すやすや眠る子どもを見つめていたの。そして明け方しっかり眠って目覚めたら、凡俗な女に戻っていました(笑)。

## 他者を受け止める

—— 妊娠・出産をめぐる話はいろんなところで書いておられますが、『北上幻想』に収められている「新しいのち」を読みますと、ご友人の墮胎の話、森崎さんご自身の妊娠とその後の出産、そして海辺での子売りの風景が、たとえば墮胎は良くないとか子売りは悪いというような判断を一切介さずに、いわば同じ地平で語られていることにある種の驚きを覚えます。

**森崎** だって日本の国がそうだったのですもの。「子はいらんかの～」と言って歩く人がいて、子どもが生まれない人や商店を営んでいる人がそういう子を育てていたのね。

私は、女性を商品とみる日本の国が不思議で仕方ありませんでした。なんとかしてそれを越えたくて、やむをえなくて『無名通信』を出したりして、つらい経験をしました。

子どもを産んだとき、自分はこんなに幸せなのに、遊郭も知らずにこの子を育てていいのだろうかと思って、子どもを抱いて博多の遊郭へ行ったりもしました。管理人が飛び出して来て、表通りへつまみ出されました。

どうして遊郭へ行こうと思ったかという、弟のことがあるのです。子どもを産んで間もなく、弟が「和んべー、甲羅を干させてくれないか」と訪ねて来たの。そのころは福岡市だったかな、新

しく住宅地になった所に小さな家を買って暮らしていたのです。弟からはいつも力づけられていたので、私にとっては弟というよりは助っ人というか、自分の弱い所をありのままに出せていたから、あの人が私を頼ってきているなんて思わないわけです。濡れ甲羅だとは思いませんでした。

弟はそのころ、早稲田大学で苦学していました。バイトと学校とでつらくて、2、3日休ませてくれと言っていたのでしょ。でも、私にはそんなふうに関心なかったわけでは。

きっと東京で遊郭も知ったのでしょ。つらかったと思いますよ。あの両親に育てられて、女は商品なんてことは知らなかったわけですから。

濡れ甲羅を乾かすために、しばらくゆっくりしてなさいと言ってあげればよかったのに。そのころは両親が亡くなっていて、妹を預かっていたし、連れ合いへの気兼ねもあったのかもしれない。

いかに自分には身近な他者を受け止める力がなにかということが身にしみたわけでは。

人間は、異質な他者を受け止める力がなくてはいけなわけでは。それは、子どもを産むこと、というのではなくて、生きている人間同士が他者を受け止め合う力がどんなに大事かということ、つらい体験を経て実感しました。

—— つらい経験ですね。

森崎 二人の子どもをラマーズ法で産んで、その後(谷川) 雁さんと暮らしているときに、『無名通信』でたいへんつらい出来事があって、起き上がれなくなったのね。内科へ診察に行っても精神科にまわされて。子どもがいるからご飯炊かなきゃいけないし、ふらふらしながらなんとかやっていたのです。

あるとき、37歳のときでしたか、目眩と同時に出血して、雁さんがすぐに産婦人科に連れて行ってくれました。流産で処置してもらったあと、和

室に寝かされて、二人で声をあげて泣きました。そしたら、同じ部屋の隅で声がるの。「よかな一、一緒に泣いてくれる人のおらすばい。わしは10回も掻きだしたばってん、夫はしらんふりしとる」って、炭坑のおばちゃんが一入言をいっていらした。

ずっとあとになって、綾さんが子どもを消すといつて私を産婦人科医院へ連れて行ったでしょ。「この人は女の大先生だ」って言って。私、びっくりしてね。

### からゆきさん

——『からゆきさん』では、九州の鳥の出身の女性が多く出てきます。

森崎 私は自分の歩ける範囲で『からゆきさん』の取材をしました。東北では「北ゆきさん」だったそうです。シベリアなどへ行ってたの。

——『からゆきさん』では、女性たちが売られたことを恨むということではなく、彼女たちの他者を包み込むやさしさが強く感じられます。

森崎 新聞紙上ではいろんなことを書き立てられるけれども、村の人にとっては親孝行の娘たちで、帰ってきたら結婚もするわけですよ。

私にからゆきさんの話をしてくれた綾さんの場合、お母さんはどこかで転売されて、彼女が生まれたのは北朝鮮の新義州あたりでした。そこで綾さんの養母のおきみさんが遊郭の女将をしていて、この子を女学校まで育てるといってね。綾さんは大きな家に、大学の教授をしていた夫と暮らしていました。

その綾さんが私を病院に連れて行き、「この人にわたしの掻き出すところをしっかりとみせてよ!」と言ったものですから、びっくりしたのです。

——「この人にわたしの掻き出すところをしっかりとみせてよ!」と綾さんがおっしゃったのは、森崎さんが何かから目をそむけていたからなのですか。

森崎 そうじゃなくて、私に、もったきちんと書いてほしかったのですよ、彼女は。

そんなところまでみせたがっていたのですから、彼女はほんとうにからゆきさんの子どもよね。からゆきさんよりもっと深く女性問題を考えられたにちがいないと思って。私に自分の苦悩をみせたがったわけですよ。私はあの人からからゆきさんを書いてもらいたくて、資料を集めて彼女のところに持っていったわけです。

それが、 कोरोリと亡くなってしまった。

それで取材をし直して、本にするのに5年くらいかかりました。

——綾さんだったら、からゆきさんをどんなふうにかかれたでしょうか。

森崎 そんなことはわかりません。でも、綾さんだったら因業小屋に売られた女たちの苦悩は書いたでしょうね。

——「この人にわたしの掻き出すところをしっかりとみせてよ!」ということばは、どのようにとらえればよいのでしょうか。

森崎 綾さんの苦悩を知ったなら、私は変わっていたかもしれませんね。

綾さんは実母が誰なのか、どこに売られたのかも知らないし、お父さんが誰なのかはもちろん知らないわけですよ。両親を知らないのよ。日本人の血ばかりではないですからね。からゆきさんとして売られた人たちは次々に転売されるわけね。

——現在も、臓器売買を目的とする子どもの誘拐のように、かたちを変えて同じようなことが行われています。

森崎 いまのほうがもっと残酷ですね。命をとってしまふわけですからね。

綾さんとおきみさんは、博多遊郭の少し離れた所に天草の女性だけがいる遊郭があって、そこに

しばらくいたことがあったようです。そのあたりの個人的なことを彼女は話さないで、女性問題としての自分の苦悩を話してくれていました。

---

## 女性問題、家制度、公娼制度

---

—— 世代の違いが関係しているのかもしれませんが、「女性問題」という用語には男性を排除する感じがあります。いろいろな人を含めたかたちで議論するためには最適なことばなのでしょうか。

森崎 当時は男性しか世の中のテーマになっていなかったわけで、女性は人格ではなく、そのへんの草木と同じとみられていました。男女平等で、人格としての個、類としての女性を社会的に認めなさいということを運動として起こしたかったわけです。

女は商品でしたからね。そのこともきちんと知っておいてもらいたいですね。

私がいちばん気になっていたのは、家制度と公娼制度が社会制度の基本だった日本でした。女たち一般は性交渉の相手であって……。戸主制度があったから、次男、三男は自由に大学へ行けるけれども、戸主としての男性は家に残って土地を守っていかなければならなくて。家制度が廃止されたのが、昭和 22 年になってようやくですからね。

父の兄は土地を全部飲み荒らしました。子どもがいたらそうではなかったかもしれないけれど。おじさんは座敷に自分の食事だけ運ばせていて、私は柱に寄りかかって「おじさん！」って睨みつ

けてね(笑)。父が「和江、おじさんも気の毒なんだよ」って言っていましたが、当時はわからなくてね。いまではわかりますけれど。土地に縛り付けられて、なんとかして逃れたくて飲み荒らしていましたね。

—— 現在でも、田舎に行けば行くほど家父長制が残っているようにみえます。

森崎 私は海辺で海女漁に出会いましたが、これは男女力を合わせなければできないのです。手漕ぎの舟で。上海女<sup>じょうあま</sup>だと深く潜っていき、男性は竿を持っていて、もう息がなくなるところにさっと竿をさすの。そうすると海女がその竿につかまって、男性が上げるわけ。

海の中で意識を失うときもあって、そのときには男の人が急いで潜って抱き上げてくるのです。

—— 海女漁をする男女は夫婦なのですか。

森崎 そうでもないです。その後訪ねたら手漕ぎではなくて小船になって、領域も広がっていたようです。どんなに深く潜ってもワカメ畑がのようになった、とおっしゃっていましたね。地球温暖化で、ワカメの自然再生がむずかしくなり、養殖となりました。

---

## 労働者

---

—— 森崎さんのお宅にはとても頻繁に人がいらしていたのですね。

森崎 雁さんと一緒にサークル村をやっていましたが、私を育てたのは坑内で労働していた人でした。

サークル村に入っている人は炭坑のなかでもインテリの人だけでした。一般の坑内労働者は賃金未払いのまま閉山になって、退職金もなく、ドス

を懐に入れてわが家にやって来たの。一緒に飲みながら、「あんたなんかより女のほうがよっぽど労働者よ！」って言ってね。子どもを隣の家に行かせて、肴を手早く作って朝まで話して、「あんたの気持ちはよーくわかるばい」って、彼は帰った。

それで雁さんは、私が本当のことを話さないと言って怒るわけよ。男を組織してる、と。組織な

んてしてないよ、って言うのですが。

—— 組織するというより、向こうから森崎さんを訪ねてこられるのですね。

**森崎** そう。「あんた字書きよるから、自分の話を聞いて書いてくれ」と言って、おいでになる。その人たちは字を知りませんからね。

—— 労働していた人たちが、自分たちの生きざまを文字にして残しておいてほしいという欲求を

示されたわけですね。誰も自分のことなど覚えていてくれないだろう、と思われたのでしょうか。

**森崎** そうでしょうね。閉山になっていきましたしね。

—— 家制度もなくて、連れ合いも子どもも自分を残してどこかへ行ってしまうかもしれないし。

**森崎** そうよ、「戸籍なんかつくらん」って炭坑の女たちは言っていました。

---

## 日本を旅する

---

—— よく旅に出ておられますが、直観に導かれての旅だったのですか。

**森崎** はい、そうです。どうしてかわからないけれど、海の向こうに大陸のある日本海側沿いを歩いてしまうのです。

(青森の)十三湖も行きましたね、何度も。海女さんに会いに。「泊まれ」って言ってくださって。私のことなんて何にも知らない人たちが、泊まれって言ってくださるのよ。

—— 朝鮮では海によくいらしていたのですか。

**森崎** いいえ。日本に帰って来てから、身体は帰って来たけど、自分の魂が朝鮮海峡の上空にぶらさがったままになっていると思っていました。

四国や宮崎へ行ったときは、なるべく太平洋側を歩こうと思うのですが、難しかったですね。

北上市へ行ったときに、ようやく自分も日本の一人の女になったと思いました。

—— 日本各地へいらっしゃったのですよね。

**森崎** 最初は九州のあちらこちらに行きました。かごんま(鹿児島)も、宮崎も。原稿料が入ったら旅に出て使ってしまう(笑)。

宮崎でおもしろかったのは、綾町というところに呼ばれて話をしたときに、地元の男性がおっしゃるの。「ここでは女のおっぱいをいじって、先っぽがとんがったらその年は幸せ」って(笑)。

—— 自分の奥さんの、ですか？

**森崎** そうじゃないわよ。それで私に「あなたもしますか?」っておっしゃるから、「おっぱいをいじらなくても、ちゃんと伝えることはできるのよ」って言いましたね。地域ごとに風習はちがう

んだなあって思いましたね。

—— 聴衆はどんな反応をされましたか？

**森崎** 拍手する人もいれば「おもしろくない」という人もいましたね。男も女も。

そんなふうにあちらこちらへ行かせていただきました。かごんままでは生まれてはじめて焼酎を飲んで、あまりに強くて眠ってしまいました(笑)。

私にとって、旅はお墓参りだったのです。お墓を見ると日本の暮らしがわかるの。文字で書いたものよりも、もっとよくわかる。水子供養がいっぱいあって、子消しがおこなわれていたことを知りました。在日の坑内労働者のお墓も辿りましたね。

—— 旅をすることと書くということは、どのように関係しているのでしょうか。

**森崎** 私は旅をしながら、肌を脱ぐように書き捨ててきました。方言で話しながら、働いてきた人びとにお会いすることができました。生まれ変わりたかったの。生き直しの旅ですね。

—— 書いているときには、ある特定の読者を想定なさっていますか。

**森崎** 父親や亡くなった弟に、ごめんなさいという意味で書いてきたところはあります。

—— 旅に出る一方で、文筆で生活を支えていかなければならないという現実もあったわけですよ。子どもさんたちに食べさせなければならぬし。

**森崎** それはそうだけど、子どもたちはさっさと勝手に大きくなりますよ(笑)。私はお裁縫したりお料理したりするのは好きなのよ。自分のためだけというのはつまらないけれど。エプロンを外

したことがなかったわね。

—— しかしお父さまから「女の子も3度の食事の火を起こすだけでは駄目だよ」と言われていたのですよね。

**森崎** そうよ、その3度の食事の用意というのは何でもないことなのよ。そんなのは日常的な、顔を洗うのと同じこと。子どもだけにご飯を作るなんていうのは、すぐにできるわけよ。

たくさんの学生たちが家に来ていました。学生運動に疲れた人たちだったのかしら。知らないけど、家でいつも料理を作って食べさせていました。

間に合わないときは、近所のホルモン焼き屋に行って食べてもらったりして。

—— 私も家事はしますが、たとえば料理しながら頭のどこかで、「こうしているあいだに仕事ができるのに」と思ってしまうことがあります。

**森崎** そういうふうにしたことはなかったわね。

日本の一人の女に生まれ変わりたいと思っていて、たくさんの人にお会いしたかったわけでしょう。それが向こうから来てくださるのだから、ありがたくてね。

---

### 生活の変化、地球の変化

---

—— さきほど、朝鮮はゆったりとしていて、日本はせかせかしているという話が出ましたが、生活のペースは現在急速に変化しています。そういう変化が思考に与える影響は小さくないと思いますが、どうでしょうか。

**森崎** そうですね。孫がまだ5歳のころ、「おばあちゃんは年寄りだから知らないでしょう、地球はいま病気だよ。どうして大人たちはこんなに木を伐るんだろう。木は炭酸ガスを吸ってくれるのに。ぼく、もう学校なんか行きたくない」と言ったのです。これはたいへんだと思いました。生まれたときから地球は病気だと感じていたわけで、5歳になってそれをことばにできるようになったのです。私はことばで彼に返さないといけないと思いました……。

親たちが仕事に出たある日、孫を誘って外でじゃんけんぼんをして遊びました。身体がぬくもってくると孫も元気が出てきて。「ぼく、地球が病気だって言ったでしょ。大人はやっと地球のお薬を見つけたのよ」と孫に話したの。「そんなもの、ない」と孫がつぶやく。「それがあったのよ。畑なの。農家だけでなく、海にも川にも人間の心にも畑はあったのよ。でも畑は耕やさないと地球の葉にはならないのよ」と言ったら、孫がにこにこして「幼稚園にも畑あるよ。先生が農薬はいけませんって言っていたよ」と。もうこれで「学校に行かない」なんて言わないと思って安心しまし

てね(笑)。

それ以来、心を耕す、ということがテーマになりました。幼い子どもに養われてきました。

人間の営みと自然との関係、これを考えていけないといけませんね。

—— 森崎さんと私は42歳違いです。森崎さんがちょうど現在の私の年齢だったところに、私が生まれました。現在の生活の変化、ことばの変化には目をみはるものがありますが、約40年後に私が森崎さんくらいの年齢になったときに、現在の私くらいの年齢の人と話をすることができるのだろうか、共通の経験や語彙はあるのだろうか、と考えてしまいます。

オール電化の普及で、火を見たことのない子どもの数が増えているそうです。火を知らない人間が増えてくると、共通の経験やことばがあるという前提そのものが揺らがざるを得ないと思えるのですが。

**森崎** ほんとよね。最近では火事にでもならないかぎり、火は見ないわよね(笑)。

—— 山尾三省さんが「火を焚きなさい」という詩でこう書いておられます。「人間は/火を焚く動物だった/だから 火を焚くことができればそれでもう人間なんだ」、と。では、火を焚かなくなった人間は何なのだろう、と考えてしまいます。

**森崎** ほんとうに久しく火を見ませんね。ワカメ

畑もなくなったし……。

——「《生む・生まれる》モノログ」で、「生(産)む」と「生まれる」が分離していないことばとして朝鮮語の「<sup>ナッスムニダ</sup>났습니다」に言及なさっていますが、その際に火のイメージが使われています。

私は、身ふたつとなった頃のうれしさを、親しい人びとに告げる時「子供が生まれたのよ」といい、「子供を生んだのよ」とは言わなかった。私は、そのもっと前、「子供が生みたい」と体がささやき、「子供があたしから生まれる」と心に教えかけた。「生みたい」と「生まれる」とが私のなかで少しずつ近づき、やがて「生む」と「生まれる」の実体が私のうえで燃える火のように一つになった。

それは「私は生む」でもなく「ぼくは生まれる」でもなく、私はことばを失って、いえ、ことばのかけらのない空間に自分がとどいていることを火が燃えるときにだけ火であるようなくあいに、感じつづけた。

それが<sup>나름니다</sup>나름니다なのだ。

それは不完全な認識による未熟なことばではなくて、生きているものたちが生きたまま生命を得るときの感動をそのままことばへ保つことが出来た姿なのだ<sup>(4)</sup>。

**森崎** そのころはまだ私は火を使っていたのね(笑)。

—— 恒常的に存在することばというのではなく、「火が燃えているときにだけ火であるような」感じでとらえられることばとして、「生む・生まれる」ということばがイメージされているのですね。

**森崎** 活字にしておいてよかった(笑)。どうして活字になったのかしら。食べるためだったのかしら(笑)。

—— 食べるため、生きるため、というのは重要なことですよ。

**森崎** そうよ。丸山豊先生が書く仕事を紹介してくださいなければ、絵描きになっていたでしょうし、絵描きじゃ食べていけないですからね。

---

### いのちを受け止め合う力

---

**森崎** 現在の家に引っ越して間もなくのことでした。家のポストに手紙が入っていたのです。「私たちのことも考えてください」と。それは男性の同性愛者の方からの手紙でした。女性の同性愛者は二組知っていましたが、男性の場合はわからなくて……。まだお返事を出す元気がなくて……。

性の問題を考えるときに、一般の人たちの意識にのぼりがたい方たちのこともわかるような世の中にならないと……。私が女性問題にこだわり続けてきたように……。性的マイノリティの人たちはたいへんですよ。

だから、性的マイノリティの方々には国に直接に会って話をする方法を模索したりなさっているんですよ。

私は性的マイノリティのことは手をつけかねていて……わからないのです。お友達がいたら個人的に話が聞けるのだけれど……。

—— 性的違和の方は少なくないようですね。

**森崎** そうよ、私の家のポストに手紙が投函されるくらいですから。

—— この問題は、私もよくわかりません。

**森崎** 違いを認めながら連帯すること、と私は女性と男性とのあいだでそれを言い続けてきたけれど、同性のあいだでのことですからね。

女のことばかり考えてきたようにみえるけれど、そうではなくて、性的マイノリティの問題もずっと頭にあるのです。

いのちを受け止め合う力を養いたい、とずっと書いてきているのに、同性愛というのは、私がみていたいのちは、そんな単純なものではないよ、と教えられるんですよ。

—— 性的マイノリティの方からすると、いのちは、男と女で産むもの、と文字になっていると違和感を覚えてしまうわけですね。

**森崎** そうなの。そういうことを話すときには、

私にはわかりかねていることもあります、と断って話すようにしているのですけどね。

—— 難しい問題ですね。語彙がないですよ。

**森崎** そう、だからその人たちもたいへんで、国に意見することしかできない、というか……。

—— アメリカだと、州によって性的マイノリティの結婚が認められていたり、ゲイ地区やレズビアン地区が公にわかるようになっていたりします。

**森崎** 一般の人にもわかりやすくなっているの

すか。それはいいわね。そんなふうになっていたら、私のような者でも理解することができたかもしれないでしょ。

—— 二十何年もの間、森崎さんはこの問題を考えていらっしやるのですね。

**森崎** 当時はまだ社会問題になっていなくて、誰にも話せなくてね。

性的マイノリティの問題は、本当に、知ってほしいです。お願いします。

**森崎和江**(もりさき かずえ)

詩人、作家。1927年朝鮮大邱生まれ。現在、福岡県宗像市に在住。

『まっくら』(1961年)、『闘いとエロス』(1970年)、『からゆきさん』(1976年)、『慶州は母の呼び声』(1984年)、『いのち、響きあう』(1998年)、『北上幻想』(2001年)、『森崎和江コレクション——精神史の旅』全5巻(2008年～2009年)など著書多数。

#### 註

- (1) 森崎和江「墓標のごとき森」1989年、『森崎和江コレクション——精神史の旅 5回帰』藤原書店。2009年。226頁。
- (2) 森崎和江「ゆきくれ家族論」1978年、『産小屋日記』三一書房、1979年、48頁。
- (3) 本インタビューでは森崎に関する背景的事実について補足説明を加えていないため、文脈のわかりにくいところがあるかもしれない。森崎の生い立ちや思想・活動については、森崎と中島岳志の対談『日本断層論』(NHK出版新書、2011年)に詳しく記されているので、そちらを参考にさせていただきたい。
- (4) 森崎和江「生む・生まれる」モノローグ『森崎和江詩集』土曜美術社、1984年、122頁。

## Language of Birth and Life: A Conversation with Morisaki Kazue

A major aim of this conversation, which was held in Munakata, Fukuoka, on December 25<sup>th</sup> and 26<sup>th</sup> of 2010, is to explore Morisaki Kazue's notions of language and life, which are strikingly different from those of modern Japan. Questioning a life/death dichotomy and the resultant tendency to see life as that which is completed within a lifetime, Morisaki has been making literary efforts to transform such a lifetime-bounded sense of life into a more continuous one by introducing the idea of birth into a life-death spectrum. Changing our understanding of life necessarily involves a change of language. Morisaki once wrote that the common understanding of language used in Japan is constructed by those who were born and does not necessarily encompass what could be termed a language of birth. "Being born" and "giving birth" should be perceived as different aspects of the same phenomenon—life. However, Morisaki points out, Japanese has no such language; therefore, life is not understood as continuous and on-going from generation to generation.

Morisaki was born and brought up in then occupied Korea where "being born" and "giving birth" are

represented with the same word. The conversation begins with Morisaki's memory of her life in Korea, and moves on to her criticism of Japan's male-centered value systems, her writing and literary activism, and ends with her unresolved questions regarding sexuality, acceptance, and life.